

転生者はテロリスト

スパロボ工房

自称、神と名のる幼女にチートやるから転生しろと言われガンダムSEEDの世界に放り込まれた主人公。

貰ったチートを使い、好き勝手に生きる事にした。

その結果、原作が崩壊し、コメディネーターから恨まれてしまった。

生き残る為に敵対者には容赦無く殲滅する！

目次

第1話	転生した
第2話	転生先はC・E・?
第3話	技術開発

第1話 転生した

人物の名前を考えるのが面倒なので、他作品から名前を拝借しました。
容姿は名前のキャラクターと同じだと思ってください。

転生した。

第2の人生だ。

前世で死んだ時の記憶が無い。と、言うより思い出せ無い。転生する時に自称神を名のる幼女からは死んだ記憶を消去したらしい。

なので、考えるのを放棄した。開き直ったと言った方が正しい。

転生した時の事を思い出す。



真っ白な空間に椅子と机が有り、幼女が座って俺？を手招きしている。

『こっちなんじゃない！座るのじゃ！』

幼女に言われるがまま対面の椅子に座る。

椅子に座ると幼女が机に紙とペンを置き、文字を書き始めた。

書き終わると紙を俺に向け書くように言ってくる。

『さあ、書くのじゃ！』

書けと言われても？？？ 何が何だか解らない。

取り敢えず、紙を見ると転生先がガンダムと書かれていた。

1 転生先、ガンダム

2 チート

これしか書いて無かった。

「コレ、何ですか？」

一応、質問をする。まあ、何となく状況は分かるが情報収集は大切だ。なるべく有利な条件が欲しい。

『お主は死んだのじゃ。転生させてやるから欲しいチートを紙に書くのじゃ！』
まあ、そうだろう。でも何でガンダムなんだ。

死亡フラグが高いじゃ無いか。

「何でガンダムなのですか？他の世界が良いです。もっと安全な世界にして下さい」

『駄目なのじゃ！お主、ガノタじゃろ。ガノタならガンダムの世界と決まって居るのじゃ！それ以外は認めんのじゃ！』

「……」

暫く沈黙が続き折れる事にした。

「分かりました」

そう言って俺はチートの項目に欲しいと思った事を書いていく。

1 チート頭脳

2 U・C・93年のアムロ・レイの全能力

3 金運MAX

4 G・ジェネの本拠地

と、書いた処で幼女から待ったを掛けられた。

『待つのだじゃ！G・ジェネは駄目なのじゃ！魂に付与するので物理的な物は無理

なのじゃ！』

「……そうですか」

暫く考えてから（健康な身体と、前世の記憶の継承）と書いて項目を埋め終わりにする。

「終わりました」

紙を幼女に向けると幼女が受取り、内容を確認して、うん、うんと頷いていた。
「あのー、死んだ記憶が無いのですが？」

気になった事を聞いて見ると、とんでも無い事を良いでした。

『あっ！死んだ記憶は消去したのじゃ！』

幼女は動揺しながら記憶を消したと言ってきた。

怪しい、絶対に怪しい。絶対に何かしただろう。

「……」じーと見て居ると幼女がぼつりと話した。

『間違っただけ殺したのじゃ、すまんのじゃ！詫びも兼ねてのチートなのじゃ！』

「はあー、仕方ないですね。謝罪を受け入れます」

そして、気になった事を聞いていくと転生先は平行世界で転生者は俺一人だけだそう。良かった、他に居なくて。

『それじゃあ転生させるのじゃ！良い来世を送るのじゃ！』

そう言われ手を翳すと俺は光の粒子に飲み込まれていった。



そんなやり取りが合って今に至る。

確認してみよう。

1 チート頭脳

2 U・C 93年のアムロ・レイの全能力

3 金運MAX

4 健康な身体

5 前世の記憶の継承

うんチートだな。これだけ在れば生き残る事が出来るだろう。

ガンダムと言ったよな。あの幼女は？

開戦迄に、ある程度の地位を確立しなければコロニー落としに巻き込まれるかもしれない。ガンダムと云えば死亡フラグ満載な世界だ。

地球でも、宇宙でも、油断できないぞ。

まず第一に俺の生存だで、第二に家族の生存だな。

赤の他人は知らん。助ける義理は無い。

とは、言っても今の俺は産まれたばかりで何も出来ないからだ。

赤ちゃんの本能に任せよう。

第2話 転生先は C・E・？

転生して暫く立ち、首が座った頃漸く目が視えるようになった。

辺りを見回してみると時計が有ったので確認してみると C・E・50 年 2 月 20 日を指していた。

ビックリである。

何と、この世界は頑種だったのだ。それと同時に安心した。

U・C で無い事の安堵感がハンパなかった。

当面は、安全だな。

今世の身体は健康そのもの、前世のような社畜では無いのが救いか。

開戦までに約 20 年余裕がある。注意する事は近い内に起こり得る S2 型インフルエンザくらいか？

そして問題なのが今の俺がナチュラルかコーディネーターか解らない事だろう。又、ここが地球か宇宙かが分からない事だ。

これらが解らなければ、行動の仕様が無い事だろう。

暫くは、赤ん坊の本能に任せよう。

「バブバブ」

（お休みなさい）

すやすやと眠り時間が経過した。



転生して5年がたった。

不幸が重なり今世の両親が亡くなった。

死亡原因はS2型インフルエンザだった。

5歳でいきなり孤児になってしまった。不幸になってしまった。幸い、俺は健康な身体を持っているので健康そのもののだが、これが異常なのだ。

健康体である為に、ケガや病気に成っても常人よりも回復が速いのであった。

かすり傷程度ならば直ぐに傷跡が無くなるという異常さだ。俺自身も両親と一緒にS2型インフルエンザに掛かり死の淵に差し掛かったのだが、異常な回復力をみせて完治した。

そして俺の身体から抗体を採取し、ワクチンを開発したようだ。

これによりワクチンが世界中に広まり地球に住むナチュラルが助かった。

だが、医者達は俺の事を気味悪がりドラキュラの産まれ代わりと影口を叩いていた。

両親が居なくなり保護する大人が居なくなっただけからは、医者達が俺に人体実験をする様になったのだ。

ベッドの上で管に繋がって人生を諦めた頃、叔父と名のる人物に助けられた。

何と叔父の名が（ジョージ・アルスター）だったのだ。

ジョージ・アルスターは悪女で有名なフレイの父親だ。

つまり俺はフレイの従兄妹だった。死んだ母親が叔父の妹だったのだ。

後から聞いた話だと、資産家の母が父と駆け落ちして家を出たらしい。

死んだ母親と叔父は仲が良く、定期的に連絡を取っていたみたいだが両親が亡くなり連絡が着かなくなり探していたのだと。

間一髪で助かった俺は叔父夫婦に引き取られて養子になった。

そして、俺の人体実験の事を聞いた叔父と叔母が激怒し、アルスター家の権力を

使い人体実験に関わった医者や科学者を社会的に抹殺してくれた。

それと、俺から造った抗体ワクチンの権利を俺個人が開発した事にし、莫大な資産を得た。

養子になり、俺の性がレイからアルスターになった。

そうなのだ。俺の名前は（アムロ・レイ）

幼女から貰ったチートにはアムロ・レイの全能力が魂に付与された影響なのか、今世の名前がアムロだった。

死んだ母親はカマリア、父親はテムだった。

父親は有名な科学者でアズラエル財閥に勤務していた。

そして、俺自身ナチュラルだったのだ。

俺の行方はアルスター家とアズラエル財閥が搜索してくれていたのだった。

今回の事件が原因で俺は失語症とPTSDに掛かり、暫く人と話しが出来なくなった。

そしてPTSDに掛かった事でニュータイプに覚醒した。

人間不信になった事で貰ったチートが完全に覚醒した俺は制御する事に時間が掛かった。

制御する切っ掛けはフレイが産まれた事だろう。

部屋で引きこもって研究していた俺だが、フレイが産まれた病院に連れられ叔母が抱いていたフレイを俺にみせてくれた。

この時、人目を憚らず、わんわんと泣いてしまった。

恐ろ恐ろ人差し指でフレイのぽつぺたを突くとフレイの小さな手が、俺の人差し指を握ったのだった。

この時に俺はフレイの笑顔に救われたのだ。

「きゃっ！きゃっ！」

この瞬間から、ニュータイプ能力を制御出来る様になった。

フレイには感謝だ。今迄の俺は世界がどうなろうと関係ないと思っていたが、叔父一家の為に今の家族を守ろうと思ったのだ。

S2型インフルエンザのワクチンも、俺というイレギュラーがいた為に速くワクチンが世界中に広まった。

そして、ワクチンのお陰で俺の名もそれなりに有名になった。

そして、俺はアズラエル財閥という縁が出来たのだ。

S2型インフルエンザがコーディネーター達の陰謀かは、分からないが、周りからの情報ではそうらしい。

ならば、俺は両親の仇を撃たなければならない。

開戦迄は、あと15年ある。

いや、後15年しか無いのだ。

プラントのコーディネーターよりも先にMSの開発をして開戦には連合にMSを普及しなければ。

その為に必要な物は、ミノフスキー粒子の発見と核融合炉の開発だ。

この世界がガンダムの世界ならば、必ずやミノフスキー粒子がある筈だ。

もしミノフスキー粒子の発見が間に合わないならばマクロスの熱核タービンエンジンや、宇宙戦艦ヤマトの核融合炉の開発や、トップをねらえに出て来る元素変換機を造れば良いだろう。

そうすれば他のオーバーテクノロジーの再現も出来る。

優先順位をつけよう。

1 元素転換炉

2 ミノフスキー粒子の発見

3 ミノフスキー核融合炉の開発

4 熱核タービンエンジン

5 U・C 製 MS の開発

これ等を10年を目安に開発しよう。

開発がすんだら廃棄されたコロニーを買い漁り、本拠地を造る。

会社を創設し、プラントよりも安価で高品質な工業製品や、食糧、医療品を製造し、友好国に撒きプラントの経済を追い詰めよう。

「そうだ！これは復讐なのだ！」

第2話になって漸く転生者の名前が出てきました。
アムロ・レイ↓アムロ・アルスターになっています。

第3話 技術開発

5歳〜10歳

この年齢で行動すれば化物扱いされる恐れがあるため、暫くは幼児として過ごしていた。

誕生日にパソコンを買って貰い株の投資をして資産運用をしていたら8歳の頃には、アルスター家全体の資産を大きく超えていた。

もちろん俺個人の資産がだ。人体実験の影響で対人恐怖症を患い、身内以外では、あまり話す事が出来ずにいたため家で引きこもっていた。

もちろん、学校には通っていない。

通信教育での飛び級をしたため、10歳の頃には、大学の資格修得を終えた。

この5年間の間に必要な準備を、ほぼ終わる事が出来た。MSに必要な技術の設計図などはPCのデータベースに保存している。重要な技術等のデータは書類で保存しておいた。

いつの世にも、ハッキングするスパイがいるからだ。

アルスター家は大西洋連邦でも10指に入る資産家だが、赤字部門も存在する。家電等の工業製品が赤字なのだ。

原因はプラントが安価で高性能品を輸出する為に地球側の国家では、太刀打ち出来ないのが原因であった。

よって、俺は実家の家電部門を買収した。

家電部門は、叔父の従兄弟が経営してたので実質、俺が乗っ取ったのであった。これには叔父や親戚達にも猛反対されたが、何とか説得に成功した。

経営者が俺になったが、実際の経営は元のままである。

経営が面倒だったので、親戚に丸投げしたのだった。

但し俺のした事はプラントの製品を買い漁り、チート頭脳を使い連中よりも安価で高品質商品を開発したのだった。工場もオートメーション化をし、人件費は最小限に押さえたのだった。

俺の経営方針は単純だった。

先ずコーディネーターをリストラし従業員は全員ナチュラルを雇用した。簡易作業にコーディネーターは必要無いからだ。余った作業員は世界中にある支社に分配

して、世界中に安価で高性能品をばら撒いたのだった。

この影響で大西洋連邦では、経済が好景気になったのだが、反対にコーディネーターが住む地域では経済が低迷した。特に影響を受けたのはプラント、オーブ連合首長国が影響を受けた。

俺が親戚達に指示したのは反大西洋連邦国とコーディネーターが沢山居る地域を指定した。

この影響でプラント製品が売れなくなり、プラントの経済が傾きかけた。

オーブでは、プラント製品のラベル張替えをし、自国の製品として偽っていたのだが、この商品が売れなくなっていた。

オーブでは経済に明るいセイラン家がいるが、氏族の位が低く発言しても却下されたのだった。

C・E・61年になり、11歳になった頃、自動車部門を買収し、梃子入れをした。製造ラインを改良して建設用レイバーを製造した。

いきなりMSを製造するよりレイバーで人型三足歩行ロボットを造り、実績を残

す事にしたのだった。

チート頭脳から引っ張ってきてレイバーを今の技術で再現して見たのだった。

当然、オリジナルよりも高性能化したのは言うまでもないだろう。

このレイバーはバカ売れした。

売る時の条件として敵対勢力の販売禁止と相手がナチュラルである事を徹底させた。

そして転売禁止にして買い戻す事を契約書で徹底させたのだった。

C・E・63年になり、13歳になった頃アニメ業界に手をだした。

自社製品をモチーフにした、アニメを世に出してみた。

このアニメも大ヒットしたのだった。

内容は、宇宙世紀を舞台にした作品をパクってみた。

宇宙世紀のジオン公国と連邦軍を舞台にした戦記物を世界中に流して世論を煽ったのである。

C・E・65年になり、15歳になった頃ついにMSの開発をした。

流石にミノフスキー核融合炉の開発は無理だったので、動力を熱核タービンエンジンで代用したMSを開発し、アニメのイベント会場で発表をした。

これ等の機体はザクⅡとガンダムをイベント会場に設置し、イベントを盛り上げた。

性能面はオリジナルと遜色無く仕上げたのだった。

このイベントの影響は凄まじく、各方面から問い合わせが殺到したが、軍では不人気だった。寧ろ、相手にされなかったのであった。

軍人達の間では『地上では只の的だ』

MAの敵では無いと不評であった。

勿論、ニュートロンジャマー【NJ】の存在を知らないのだから当然であった。

同年にはホバー関連の兵器を売出した。

C・E・66年になり、やっと元素転換炉が完成した。

だが、元素転換炉が完成しても精製率がオリジナルの5割ほどしかなかった。

この低さで精製を繰り返した素材で組立て元素転換炉を製造し、3基目の元素

転換炉で漸くオリジナルと同性能になった。

オリジナルの性能を引き出すのに2年程掛かり完成に辿り着いたのだった。

1基と2基を解体し、3基の元素転換炉に入れ新たに素材を製造し1基分のパーツを製造した。

このパーツを宇宙に運び、宇宙にも製造ラインを確保する事にした。

C・E・68年になってL4宙域の（GARMR&D社）のコロニーメンデルを買収しコロニーをゲットした。

このコロニーに元素転換炉を設置し宇宙での拠点とした。

そして、コロニーメンデルをグリーンノアと改名したのだった。

元素転換炉で製造した核パルスエンジンをグリーンノアコロニーに設置し、L3宙域に運び光学迷彩を掛けコロニーを隠蔽する事にした。

元素転換炉の完成のおかげで短時間で技術の再現が可能になり、ミノフスキー粒子や、核融合炉の製造に成功し、MSと戦艦の量産体制を整える。

当然、ニュートロンジャマーキャンセラー【NJC】の量産をしていくのだった。

転生者はテロリスト

著者 スパロボ工房

発行日 2021 年 2 月 10 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/218863/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
